



# 「創造的時代のスウェーデン」

ヨーテボリ大学 パトリック・ストローム博士

## 創造性は何故必要か

こんにちは。きょうのトピック、創造性の時代におけるスウェーデンについてお話しします。

この1年半くらいの間、創造性の必要性について取り組んできました。では、何故、スウェーデンばかりか、日本やほかの各国でもこの創造性が必要なのか。これまでの産業の中心地はもう発展できないという考え方があります。それは、米ピッツバーグ市にあるカーネギーメロン大学の教授で作家でもあるリチャード・フロリダ氏が「クリエイティブ・クラス(創造的な階層の世紀)(2003年)」という本の中で書いたものです。ピッツバーグという土地が、サンフランシスコやオースチンなどほかの都市と比べても非常に先端的、かつ最新の発展を遂げていることもその背景です。

今、都市は、以前よりも重要性を増し、経済的にも非常に大切な地域になっています。それとともに、人々を結びつけているのが大学です。東京やニューヨークなどの都市だけではなく、上海やインドの都市なども急成長を遂げています。

次に大切なのは人間です。今までのように資本やコストだけではなくて、競争力を高めるのは人の力だと言いたいと思います。

フロリダの言っていることでおもしろいのは、寛容度の高い地域はほかの地域よりも人を引きつけ、それがひいては、アイデアや、資本を増すことにも結びついているということです。寛容は労働市場に可能性を与えるということでもあります。

## 3つのT

リチャード・フロリダ氏は技術

(Technology)、才能(Talent)、寛容性(Tolerance)の3つのTを指摘しています。フロリダ氏が創造的な階層を掲げたことは重要だと思っています。この創造性という点においてはご存じの通りスウェーデンが1番だと思えます。フィンランドやデンマークのような北欧の国々も上位に挙がっています。そこでフロリダは、この北の、寒い、暗い、小さい地域に何かあるなと思ったのではないかと思います。

スウェーデン国内の県、市町村に分けて創造性の指標を打ち立ててみたのです。290ある市町村すべてにおいてやってみました。

3つのTの一つ、「才能」に着目してスウェーデンを見てください。

国際的に見てかなり高い数値ですが、スウェーデンの県レベルでは平均が35%で、1番目がストックホル

ム県、2番目が有名な大学のあるウプサラ県、3番目に南部のスコーネのあるヴェストラ・ヨーランド県もやはり高い数値を示しました。

市町村レベルではもつと数字にバラエティーが出てきますが、高い数値を見て驚きます。上位にあるストックホルム市近郊の都市ソルナ、グニア、そして、ストックホルム市も約50%の人々が創造的階級に属しています。ヨーテボリ市が42%です。これからもわかりますように、都市部に創造的階級が集中していることがわかります。

## 高学歴と産業育成

スウェーデンでは、1990年から2005年の間に高学歴者、これは3年以上大学教育を受けた者と定義していますが、その率が急激に伸



びました。スライドの表をご覧になっておわかりのように、ストックホルム市では2倍近く伸びています。スコーネ県やヴェストラ・ヨーランド県でも急増しています。高学歴者の割合を上げるとは国の政策です。

2番目のウプサラ市などは2005年には人口の4分の1が高学歴者になっています。値が上がってきているルンド市もウプサラ市も優れた大学があつて、大学にかかわつてい

る人の割合が高いです。

次に、「技術」指数を見ていきたいと思います。ストックホルム市やウプサラ市、ヴェストラ・ヨーランド県が高い数値を示しているのはおわかりと思います。ヴェストラ・ヨーランドは都市というよりはむしろ周辺を含めての地域なのが興味深いと思います。技術指数は様々なパターンを示していますが、ハイテク産業がこの指標に結びついているのがこれでおわかりになると思います。

次に、3つのTの中で、一番難しい指標、「寛容性」に移りたいと思います。一体どのようにして寛容性を計るのか、計測するのか、これは非常に難しいです。

この表は外国生まれの人口率です。この外国生まれというのは、本来に外国で生まれた人を指しています。国際的に見ても非常に高くスウェーデン全人口の20・5%の人が外国生まれです。ストックホルム県からヴェストラ・ヨーランド県は特に高いです。一番少ないのは北部のヴェステルボッテン県です。北部全体に共通することで、スウェーデンの南北差ということがいえると思います。市町村レベルでの外国生まれはどうでしょうか。やはりスト

ックホルム市は20%と多く、デンマークに近い地域にあるマルメ市、ルンド市は4分の1のものが外国生まれです。ヨーテボリ市は5分の1、そして、北部のヴェステルボッテン県のウメオ市は割合が低く、北部の特徴を示しています。

寛容性の指数について、もうひとつ芸術家指数を例に挙げてみたいと思います。音楽家や演劇関係者などの芸術家の割合では、やはり首都部のストックホルム市にかたまつていくということがわかります。5番目のゴットランド地域は首都から離れていますが高い値を示しています。これはその地域が芸術に力を入れているからだと思います。

### スウェーデン全体での創造性指数

以上3つのT、技術、才能、寛容性を合わせるとスウェーデン全体でのクリエーティブ・インデックス、創造性指数が出ます。ストックホルム市、ウプサラ市、スコーネ県が続きます。ヴェストラ・ヨーランド県はヨーテボリ市があるところでは5番目のエステルヨーランド県はリンシヨーピン市があるところでは、去年、北海道から「北海道スタイル」の方たちがたくさん訪れ

たので、そのおかげで上がったのでしょうか。

これらの結果から、ストックホルム市、ヨーテボリ市、エステルヨーランド県、それから東部のゴットランド県など限られた地域において創造性指数が高くなっています。

これからスウェーデンが挑戦していかねばならないことは、経済的な効果を上げるためにも、それぞれの地の利を生かしていくことだと思います。

都市の規模の大小はあまりいう必要はないと思います。というのも、ヨーテボリ市は東京と比べて非常に小さいです。規模そのものはそんなに大きな要素ではないということです。

最後に申し上げたいのは、3つのTの、あくまでもコンビネーションが大切だということです。一つのT、例えば技術だけ、例えば才能だけを上げようとしても、それはそれぞれの地域発展のためにはならないのではないかと思います。

この調査の後に私たちがやらなければいけないのは、もつと調査の質を高めることです。日本やほかのヨーロッパの国々と比較していくこともできると思います。



## 「ヨータベリ大学生による調査結果発表」

○フレデリック 皆さん、私たちは12人でこのレポートを書きました。いつでもご覧いただけますので、私たちにコンタクトをしてください。

日本の安倍晋三首相（当時）は、日本の教育システムが旧態依然としているので、国際競争力をつけるためにも改革しなければならぬと宣言していますが、私たちは何よりも創造性に着目したいと思っています。日本において創造性と教育が大それた事だと思います。

日本とスウェーデンの教育について、パトリック先生が今説明してくださったように、リチャード・フロリダ氏の3つのTの指標を使いながら比較してみました。創造性を定義するのはとても難しいと思うのですが、問題を解決する新しい方法だと考えます。そして、創造的階級について定義をしなければなりません。階級という言葉を使っていますが、今まで皆さんが想起するような階級とは違います。経済的な価値を持ち共通するものがありますが、知的財産を持つ者も持たない者もいます。次に知業社会ということですが、

これも定義しなくてはなりません。知業社会とは、今までの工業分野よりもサービス分野が大きい社会のことです。

フロリダ氏の3つのTを教育に当てはめていくと、創造的な科目に芸術や音楽などがあり、抽象的な問題解決方法を教える数学のような科目、小論文などがあります。教育システムにおいて創造的要素は大切だと思います。個人主義、ヒエラルヒー、階級社会、それから学生自身どのように学校の運営に参加しているかとか、環境や身の回りは実際にどうなっているかとか、これらは創造性に影響を与えていると思います。

私たちは、国レベルではどうか、先生や校長のレベルではどうか、そして学生のレベルではどうかというふうに分けてリサーチを進めました。それらについて、セバスチャンが話します。

○セバスチャン 最初に国レベルを見てみました。スウェーデンと日本、生徒にとって何が大切と考えているか、実際に知業社会にどのよう

に対応しようとしているか、教育において基礎的な価値観は、そして学校における創造性は、学校に自由裁量があるのか、スウェーデンと日本ではどのくらい自由裁量が違うのかなどに着目しました。まず、私たちは、創造性を高めるためには人々が自分自身の頭で考えなければならぬと考えました。

基本的価値については、学校の中の民主主義、自主性・個人主義、そして、男女平等等に着目しました。教育には民主主義と自主性はとても大事なことで、両国とも学校に自由裁量があることが大切だとは言っています。何が違うかといえますと、日本においては、残念なことに、市レベルでは実際には自由裁量が与えられていないように見えます。国からのトップダウンで、その指示によって動かなければなりません。もう一つ問題だと思うのは、日本では中央集権が強く、一つ一つの学校が教師を直接雇えないわけです。県の教育委員会がその裁量を持っています。このことは地域毎の学校の自主性を育てることを阻害して

いる例ではないかと思っています。スウェーデンは政府レベルで、一人一人が意見を持つことが非常に大切で、それが一人一人が社会に参加していくことに結びついている、それが大事だというふうに言っています。学校でも男も女も平等で、同様に権利があることが小さいころから教え込まれています。

日本でも文科省は一人一人が個人の意見を持たなければいけないということを書いていて、それはスウェーデンの教育省が言っていることと同じですが、民主主義や男女平等の大切さはうたつてはいません。民主主義は創造性のためには欠かせません。一人一人が意見を言うことは教育効果があると思います。

学校における創造性ということに移りますけれども、創造的科目ということについては、日本もスウェーデンも芸術や音楽や演劇があつてそれぞれ目的があります。ただ、日本では、文科省によって定められている目標というのはどうも、創造的科目で知識を広げるといふことにあるようにです。芸術、音楽どちらの科目

に移りますけれども、創造的科目ということについては、日本もスウェーデンも芸術や音楽や演劇があつてそれぞれ目的があります。ただ、日本では、文科省によって定められている目標というのはどうも、創造的科目で知識を広げるといふことにあるようにです。芸術、音楽どちらの科目



においても、日本では、スキルアップすること、日本の文化を理解すること、主眼が置かれております。私たちが驚いたのは、こういう創造的科目の内容も文科省から決められているということ。例えば、子供たちが歌う歌さえも決められています。スウェーデンでは、芸術や音楽の科目で、知識ももちろん大事ですけれども、創造性を高めること、分析すること、コミュニケーションすることがとても大事だというふうにあります。

スウェーデンにおいては国語、スウェーデン語ですけれども、それはやはりいちばん重要な科目の一つとなっています。国語でスウェーデンと日本の大きな違いは日本語には漢

字があることです。習得するのに時間もかかります。小学校、中学校が漢字を習得する主な場ですけれども、これはやはり主要科目全体に影響を与えていることは間違いないです。私たちは、日本の言葉を習得するということにかかる時間が創造性の発展に少し影響を及ぼしているのではないかと思いました。

次に、創造性を高める可能性に着目したときに、スウェーデンと日本でどのような違いがあるかを見てみましょう。

日本の義務教育では1千50万人の生徒がいます。スウェーデンでは96万人しかいません。やはり学生・生徒が少ない方が創造性を高めやすいと言えると思います。スウェーデンの義務教育では、1年間に、生徒1人当たり132万7千円かかります。日本では、小学校では1人当たり30万2千円、そして中学校では1人当たり44万円で、創造性を高める教育にはお金がかかると言えます。教師の人数も増やせるので学生・生徒からのアクセスもしやすくなり、環境そのものもよくなると考えます。

次に、クリストファーが、先生と校長がどのように創造性にかかわっているかを発表します。

○クリストファー 教育システムの中の階層性、先生や校長先生がどのように創造性に影響を与えているかを見ていきたいと思えます。

日本では教育システムが垂直なのに対して、スウェーデンでは水平だといえます。校長などの役割も全然違います。スウェーデンでは、校長の役割は団体全体の指導者という感じ。例を挙げますと、毎日普通の教師が校長と話ができる、そして、コーヒーブレイクには一緒にコーヒーを飲む、または、ひとりの先生が何かの理由で来られず、代替要員も見あたらないときには、校長先生自身がかわりに授業をします。

日本ではより階層がはっきりしていると思えます。終身雇用性が強いこともあって一人一人の地位や役割がはっきりしています。校長は、私たちが思うには企業の社長のような感じで、ほかの教師や学生・生徒と話さず、ほかの人と距離があるように思えます。その著しい例が、校長が帰らない限りはほかの先生が帰れない、帰宅できないということが日常的にあります。教師と校長と意見が違つては困るので、校長にも見えない風潮があるようにも見えます。

屋外広告業許可第571号

大型サイン・ネオン・内外各種サイン・企画・設計・施工

サイン&ディスプレイ

**UNITY AD**

有限会社 ユニティ・アド

〒065-0010 札幌市東区北10条東6丁目15-9 1番館1404

TEL・FAX 011-733-6855

Email: unity-ad@ex.me-h.ne.jp



す。学生に創造性を教える教師は自ら創造性を発揮しなければならぬのに、これはちよつと困つたものではないかと思ひます。しかし、スウェーデンに比べて担任教師に着目した場合、生徒・学生と非常に近い関係があると思ひます。それが今まで述べた階層性の弱点を補完する役割を果たしているのではないかと思ひます。

教え方に違いがあつて、創造性の育成にも大きな違いをもたらしているのではないかと思ひます。日本では主に知識を与える、スウェーデンでは、まず生徒・学生のやる気を引き出すこと、そして生徒自身で考えさせることにあります。日本では、生徒・学生は、自分自身で考えるというよりも、先生がやる問題解決方法を習うわけです。

日本では、例えばあるクラブ活動で有名などころにその才能がある子供が集まるという特徴があり、スウェーデンではそれに比べて様々な学校に才能ある子供たちが広がつていくという特徴があります。このことから、私たちは、日本がいいとかスウェーデンがいい、どちらのやり方がいいというふうには言えないと思ひます。

教育システムの中での寛容性に着目した場合、スウェーデンでは他国

を知ることに時間を割いています。日本では、外国のことを学ぶことは学ぶのですが、スウェーデンと比べて時間数が少ないです。宗教の知識という科目も日本にはなくて、日本では2、3時間そういうことについて通り過ぎるだけです。もちろん、日本とスウェーデンでは状況が違います。日本には移民が少ないということでも学校でも外国人が少ないです。このような違いは宗教や歴史についてもいえて、宗教や歴史については文科省では重きを置いていないということ、それを教える必要がないわけです。

次に、シグリートに、生徒自身が学校運営にどのくらい参加できているのかということについて話してもらいます。

○シグリート 2つの国の日常生活の中で、生徒自身がどのくらい学校運営に参加できているのか、どのくらい影響力を持っているのか、物理的に学校の環境がどうなっているか、先生がどうなのか、など着目してみました。

スウェーデンでは定期的に生徒会

のミーティングが開かれていて、ど

こを変えたいということを活発に話します。学生と教師と親が参加する、改善のための話し合いも年に2回は行われます。日本では、何かをしようと思つても生徒はそんなことは無理だというふうに思ひます。また、スウェーデンでは、生徒が何か不服があれば、いろんな教科の先生にそれをダイレクトに報告できます。そして、先生も一人一人の生徒にアドバイスを与えるということが出来ます。日本では重要な決定に生徒・学生は参加できません。創造性の育成に影響を与えていると思われ

ることに、ほかに、そつげなく厳肅な感じの学校の建物、生徒・学生たちの責任である清掃、全員が先生の方を向いている机の並べ方などいろいろあります。スウェーデンの学校はとても温かい雰囲気です。フルで様々な装飾もあります。清掃は従業員が雇われています。机は、どう並べてもいいことになつていて、よく2つないし4つの机が、いろいろ協力して何かをするためにセツトにして並べられていることもあります。スウェーデンではこのように、話し合いとか、分かち合いとか、協力ということが大事にされてい

て、日本とはちよつと違つています。学習とその評価については、スウェーデンでは、テストだけではなくて、小論文などのほかのことを考慮して評価します。日本では、大体がテスト、それも期末試験一発で決まつてしまふ部分が非常に大きいと思ひます。期末テストというのは学校でこの日というふうが決まつていて、その日に向けて学生たちが非常にハードに集中的に勉強するということになりまふ。その結果何が起きるかというところ、テストが終わるとせつかく覚えたことを忘れてしまふということが起こりがちです。スウェーデンでは、実際にそれがどのように役立つかということに重きが置かれて、実際、その知識も役立つわけです。英語教育が日本では成果を上げていないということが言えると思ひます。英語教育が文法に偏つていることが挙げられると思ひます。それは大きなマイナスイメージであると思ひます。

芸術、美術に関して、例えば、日本では絵をかくときに同じものを描くということが多いのですけれども、スウェーデンでは違うものを描くということが多いです。あるいは、もし同じものだと自分もそれを



どのように描くかはかなり違っているということが挙げられます。

先輩・後輩のシステムが日本にはありますけれども、いい点としては、これがうまく作用している場合は安全性が保たれることなどが挙げられると思います。ただ、悪い点は、自由を抑制されたり、後輩が何か言いたいことがあってもそれを表現することができないということがあります。

では、最後に、フレデリックがまとめをします。

○フレデリック 創造性の育成という時、日本でいちばん重要なのは、創造性が欠落していることに気づいていないことではないかと思いま

す。それがひいては、工業社会から知業社会に移行しなければいけないのにそれができていない、そこにつながっていると思います。OECDの比較でも日本のレベルは教育で非常に下がっています。これは本当に残念なことです。

創造性の育成に何が重要なのか。

例えば、中央集権的な教育から、もっと学校が自立できる教育のあり方にするのが大事だと思いますし、それから、知識を詰め込むよりも、学生をやる気にさせて自分で考えさせることが大事だと思います。

学生・生徒の面でいえば、一番の違いは、先輩・後輩の年功序列制度ではないでしょうか。この先輩・後輩制度はいい点もたくさんあると思いますが、将来、もっと多様性のある経済システムにしていかなければいけないというときには、この先輩・後輩システムはいけないのではないかかなと思います。シグリートが言っていたように、若い生徒が先輩のことを気にして意見を言えない、意見を言うことが抑制されるというマインスマがあると思います。

結論としては、私たちは日本に創造性はあると思います。2006年の創造性指数のリストをここに挙げ

たのですけれども、このように日本が非常に高い順位にあります。これは日本の教育システムの中でつくられているわけではないと思います。クラブ活動が大きな意味を持っていて、先生と生徒が非常にいい関係を保っていて、文科省などの規制がそこでは少ないということが言えると思います。このクラブ活動はスウェーデンにはないもので、スウェーデンは日本を見習っていったらいいと思います。

日本で創造性を高めているほかの要因としては、ハイテク・クラスターが挙げられると思います。これは、例えばロボット産業も含まれると思いますし、それから、トヨタやホンダなどの企業がどのような役割を果たしているかということも非常に創造性の育成に役立っていると思います。

これらは日本の教育システムの中で創造性を高めるのに十分なのでしょうか。言いたいのは、こうしたことが話し合われれば、目的の半分は果たされたのだと思います。ただ、重要なのは、政府がこれを本当に実際の方策に移すかということであり、これは私たちはちよつとどうかなというふうに思いました。

## 企業の販売促進をサポート！

プレミアム・ノベルティ  
その他ギフト用品・カレンダー  
うちわ・タオル・企画、制作

# TOMITA.corp

創業大正14年

株式会社 丸富 富田商会

〒060-0041 札幌市中央区大通東5丁目4富田ビル TEL.(011) 231-4824 FAX.(011) 222-4854